

KIZUNA NEW STORY

特集

平成25年の創刊からこれまで、

「つなぐ、ひろがる、続く、続ける」を基本コンセプトに

Vol. 50で早8年、多くの情報を発信してまいりました。

これからも、新しい生活様式を意識した持続的な

暮らしに役立つ情報の発信にとめてまいります。

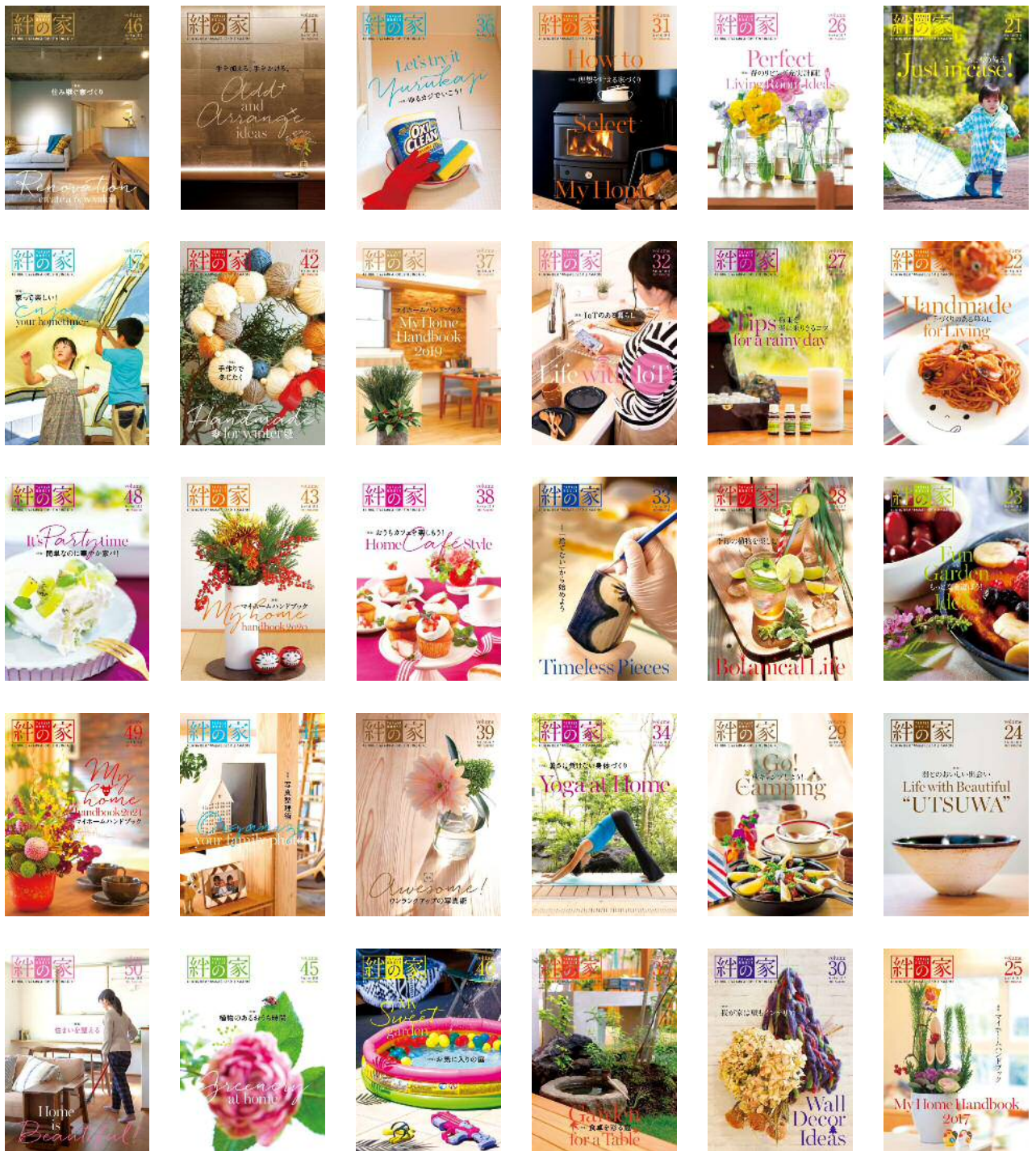
リニューアル最初の号となる今回の特集では、

改めて、このマガジンのタイトルでもある”絆”にスポットをあて

社長、現場、お客様とそれぞれの絆にまつわる物語をご紹介します。

ここからはじまる
”絆”の物語。





KIZUNA NEW STORY

代表取締役社長

森 勇清 ◆ もり ゆうせい

垂水市出身。昭和61年(1986年)に鹿児島県立加治木工業高等学校・建築科を卒業後、ヤマサハウスの前身にあたる山佐産業・住宅本部へ入社。必要なポストを歴任したのち、令和2年(2020年)5月に代表取締役役に就任した。一級建築士。

KIZUNA NEW STORY

TOP INTERVIEW

家族の笑顔が一番。

今までもこれからも。

昨年5月に就任したばかりの森勇清代表取締役社長。

自身も「絆の家」オーナーとなって3年半。ご自宅のこだわりやお気に入りの場所などについて、奥様も交えてお話を伺いました。



和室はあえてコンパクトな空間に。愛犬ひなちゃんとの癒しの時間。

3人のお子様は就職や進学などで家を単立ち、現在は奥様との二人暮らしという森社長。3年半前に建てた2階建てのご自宅には、森社長と奥様のこだわりが存分に詰まっている。「家族や友人、誰もが来やすく、みんなが笑顔でいられる家にした」というのが一番の希望でした。以前、長男が20人くらい友達を連れてきたことがあって、家の中がまるで合宿所のようになったこともありました(笑)(奥様)

また、大の植物好きだという奥様がこだわったのはお庭。玄関横は和、テラスは洋をイメージした庭を作った。現在大きく成長した木は、阿蘇の山まで足を伸ばしてご夫婦で選んだそうだ。リビングからその両方の庭を眺めることができるのも奥様

のお気に入りポイント。また、庭との距離を近くにするためにテラス部分は室内と高さを揃え、リビング空間の広がりにより感じられる効果も生み出している。

森社長も「家族が集まってリビングで寛げる家にした」という思いは奥様と同じ。それに加えて運氣向上や家族がより快適に過ごせるようにと、設計に風水を取り入れた。「風水では、火を扱うキッチンや子ども部屋などそれぞれの位置や間取りに吉凶があります。風水の観点から私が大まかな設計図を起こし、それをベースに社内の設計士に設計してもらいました(森社長)」。間取りだけでなく室内の色やアイテムなどを活用すること

で、実際に運氣が良くなり、笑顔も増えた気がすると語る森社長。常に笑顔で過ごすことは、心と体の健康にもつながる。そこには目に見えないものも大切にしていきたいという、森社長の思いがある。

そんな森社長の、自宅が一番お気に入りの場所はテラス。椅子に座って静かに夜空を眺める時間は、心を空っぽにできる貴重な時間だという。また、地窓から和の庭を眺めることができる和室で、ゆっくり過ごすことも多いそうだ。

ご夫婦でよく霧島にドライブに出かけ、神社を巡って御朱印を集めることが最近のマイブーム。最近では新しい家族として犬のひなちゃんを迎え入れた。森社長もすっかりメロメロだ。

「子どもたちが帰ってくるのに合わせてテーブルの位置を変えたりするのも楽しいですし、いずれは暖炉も置きたいと考えています。家の性能や環境への配慮など私たちヤマサハウスの思いはたくさんありますが、最終的には『家ってやっぱりいいよね』と思ってもらえるような、そんな家づくりをこれからも続けていきたいと思えます。もちろん、自分の家からですね(笑)」







小笠原収納A
小笠原収納B
小笠原収納C
ロフト

2F

1F

リビングダイニング
キッチン
洗面+脱衣室
浴室
トイレ
玄関
下下
バルコニー





お気に入りの場所の様子など
動画でご覧いただけます。

KIZUNA NEW STORY

Mr. Kizuna no ie

お客様や地域との ”絆“を深める情報誌として

編集担当として創刊号から50号まで『絆の家』の制作に携わった元住宅本部次長の本村幸男さん。
創刊に込めた熱い思いを伺いました。

今年2月までヤマサハウスに勤めていた本村幸男さん。『絆の家』創刊号から50号まで編集に携わっていた。『絆の家』創刊前は社外誌も兼ねた社内報『やまさ』を発行していましたが、次代のヤマサを創造し、再構築するための羅針盤として、またお客様同士やステークホルダーを結びさらなるコミュニケーションツールとして、『絆の家』を創刊するに至りました。当時のスタッフは本村さんも含めて2人。原稿集めに奔走する忙しい日々を支えていたのは、ヤマサハウスの原点である「企業は人なり」という言葉だった。社内で働くスタッフの育成を兼ねると同時に、お客様や地域との「絆」をより深めていくこ

と。それが新しい情報誌に課せられた義務であり、鹿児島建築業界のリーディングカンパニーとして当然の使命であったと本村さんは語る。「今後は、紙媒体のメリットを生かすと同時に、ウェブやSNSを活用して広報活動にもつなげて欲しいです」。本村さんの思いをのせた『絆の家』は新たなステージへと船出したばかりだ。



会社を辞められてからも何かと頼れる存在の本村さん。若いスタッフとの『絆の家』談議は尽きない。





世代を超えて

引き継がれる“絆”

愛着のある家を引き継ぐことになったご家族。
リノベーションにまつわる様々な思いを
ご主人に伺いました。

茶畑に囲まれた、どこか懐かしい雰囲気の一軒家。その裏にはかつての製茶工場がある。「祖父は朝早くから夜遅くまでお茶の仕事をしていた、子供ながらに尊敬していました」とご主人。中学生の時に隣に越してきてからは、仕事を手伝ったり、庭先で一緒にひなたぼっこをしたり、ある時は散髪を頼まれたり、そんな思い出を抱きながら、やがて家を受け継ぐことになった。そんな家が32年前にヤマサハウスで手掛けていたことが偶然わかり、プランニングの相談が始まる。結果、基礎と骨組みだけ残して、機能的かつ子供たちがのびのびと暮らせるようにフルリノベーション

ンを選択した。広いリビングには家族が自然と集まり、自由に過ごしてもそれぞれの気配が感じられる。大きな窓からは、子供たちが茶畑の先の実家へ遊びに行くのが眺められるのだそう。「将来、子どもたちがこの家を継いでくれたり、もしくは近くに家を建ててくれたら嬉しいですね」。住まいと共に、引き継がれていく家族の絆があった。



取材時はご長男がソフトボールの練習であいにく不在。それでも笑顔の絶えない終始なごやかな雰囲気。

KIZUNA
NEW
STORY
Next generation